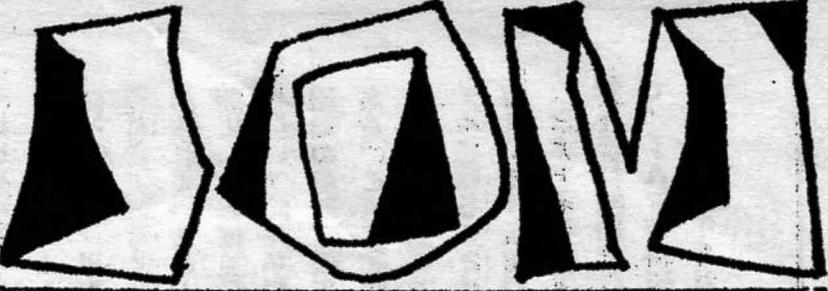


とよえよ
一



Eldonas. Kou MUKAI
1-1307, 1-6, Asahimachi Abeno, Osaka, Jap.

25, Julio, '84 N-ro 282.

イオム通信

郵便物等の支取り陽計が
まいりました。

の六・六四で、四の丸です

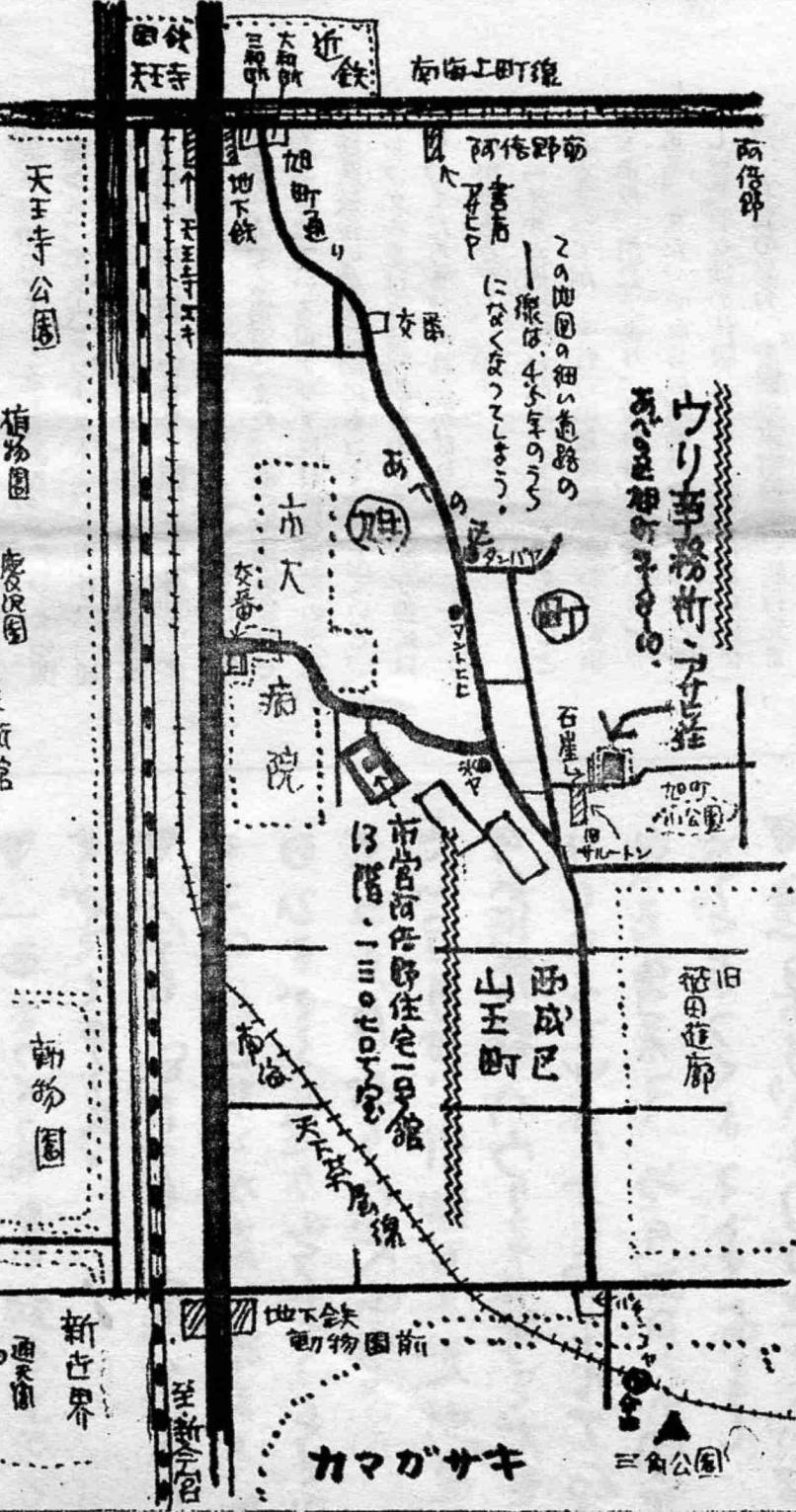
▼新住所・**〒545 大阪市阿倍野区旭町一丁目六番、一一三〇七。**(国鉄筋状線。
地下鉄・御堂筋線・谷町線・天王寺駅下車、徒歩西へ約50分、市大病院前交差点左折
病院玄関斜め向いにみえるビル。市営アベノ住宅一号館13階、(307号室。)

旭町2丁目(サルーン)から、1丁目(3階)まで、近道だと、ほんの300メートルほどだが、この20日間ほどの雨日・多、歩き一回=10回・す

さうての往復。途中・すれちがうと
きは体をよこにせぐと通やくみなみ
路へとさうより家と家とのすき間の抜け道から・旭町本通り商店街へつ
きつたとたん・急にロードバイブルへとどきのぼる坂がある。それをのぼりつめた
市大病院の方からつづく平地に・共生
こしはなれて・二・三〇七館の4階高層
じんが立つていろとじつかけ。

刷物類や、一見ゴミとまがう小物許り
だが、それを、ダンボールにつめて、ウ
リ事務所へ運びのと、犬山ユキと、三
蔵ユキにわけて、ついでにウリ事務所
も大整理。そんなわけで、当分、ま
だ、二路と坂道往来はつゞく見ど。
8月上旬頃まで、引越中といふことに
ある。

▼六月下旬から、来信などへの返事
も手がつかず、机に向ったのも今日久
しぶり。しばらく非れつ巴キをど
うか心あるしさ。



▼ 田住所 サルード（旭川二二一）はノリ木で床板。
▼ 従つて次の住所も必要なことになりました。（函館駅前に届けましたので、一年
向は、田住所でも輸送して貰おうかと、運れるおそれがあります）

- 水田元の石井越 ○ 千歳のへの穴。
- 防弾被服販賣者インター日本部 War Resister's International - JAPAN ○ 藤原ひる
○ 三社H-日本橋のケーリー・ジャパン ○ トコー 大阪。
- ナマズ・コレクティヴ NAMAZU Collective
- もりのや (ウリ氣付)

アパート、アサヒ荘の部屋は、今回大ソーシとして、面田一新?。6月1日印
刷及び書類等保管用。1号室一會議・座談用。2号室一物貯置場と活用とし
て当分は維持します。(3~5年後は(に過ぎぬ)明け渡すことになる見込み)
▼5月、アサヒ荘の電話移転でなくなりましたが、アサヒ荘を窓の階級中ほどい、
シンク電話(59)五四三〇があります。呼出しは、緊急時以外は不^可。アリ事
務所に、確かに誰かいると判つている時は、ベルを二回ならして一応入り、改め
てかけて下さい。その合図で、電話口に(きこさん時も)出ます。(きこさん時も)
▼アリ事務所を訪問して、誰もいないときは、毎日〇時十九時まで下さ
う。13番(新住町の略称)にあれば、5分ぐらじで、かけつけます。

「イオム通信」

小島輝正

「IOM」（題字はこうなっているが、実質は、つねに併記されている「イオム通信」である）は、向井孝が65年（昭40）に姫路で創刊した。同年2月、アメリカの北ヴェトナム爆撃開始を機にである。

「IOM」（エスペラントで「少しの」少量化の意味だそうである）という名前には、しかし由来がある。

47年（昭22）3月、向井と、彼の戦前から新興俳句の仲間だったという山口英、それに柳井秀が加わってIOM同盟が結成され、詩誌「IOM」が創刊された。昭和22年といえば、私と同じ大正9年で、10月生まれという向井は26歳である。この詩誌「IOM」は、のちに高島洋らが加わって59年（昭34）まで続々、その間に合巻の詩集「戦争」「平和」「イオム同盟詩集」（57年刊）で、これは向井から贈られたのを私が持っている）を出した。その名前を向井が継いだのである。

先走つておくると、この詩誌「IOM」は、のち72年（昭47）12月に、ほぼ同じ頃ぶれで、季刊の「思想・文芸」誌として神戸で再刊されて76年6月の11号まで続々、その間ここでいう向井の「IOM」は、72年12月刊の10号から76年8月の193号まで「SALUTION」へ「サルートン」、エスペラント。英語ならSalute（仲間うちで「今日は」というところか）と改題し、19号から旧名に復した。

以後、今年6月発行の201号まで、創刊以来19年数カ月、平均は20日に一回は出しつづけてきたことになる。80年（昭55）2月の24号からファックスになるが、それまでは向井自身の手によるガリ版で、通常半紙大裏表2頁、ときにそれが2枚4頁またはそれをこす場合がある。記事もほとんど全部自分が書いていいるので、一回平均をかりに12枚（としても総枚数は3500枚に近く、單行本10冊分に該当する。

その膨大な量と多様な内容とをもつ記事や文章を、くわしくはおろかごく大づかみにすら伝えることはもとより不可能である。そこには、「自らアナキストを称したことではないが、そう呼ばれることを拒みはしない」という一微な自由人向井孝の20年にわたる運動と斗争の歴史が、彼自身の筆跡で逐一に刻み込まれている。そして、何よりも特徴的なのは、それが、果なるタマエの論議や組織用の言辞ではなくて、つねに彼の肉声をもって語られていることである。運動者と私人との間にしばしば受けられる乖離がそこには全くない。向井孝個人の論理、倫理がそのまま運動の論理、倫理であり、その逆もまた真である。これは稀な例というべきだろう。

そういう意味で、私も彼になんらかのレッテルをはることは控えたいと思う。たしかに彼は、68年（昭43）年に解散した「JAF」（日本アナキスト連盟）の一員であり、その解散後は姫路で自ら「自由連合社」を創設して、JAFの機関誌だった「自由連合」を継続発行（72年9月まで）した。その意味では、

天下周知のアナキストである。また、その関係から、エスペラント内部でもあり、「通信」にも時々彼のエスペラントの文章が掲載される。国際組織W.R.I.（戦争抵抗者センターレッテルをはれば何枚ものレッテルが彼にはりつくだろう。それもかなり度つきついレッタルがである。

「イオム通信」の記事、文章も、そのほとんどすべてが、それらの運動にかかわる記事であり、消息であり、彼自身の見解の表明である。また、それらの運動のなかでの、しばしば物騒な彼の体験（アナキスト内部の内ゲバ、右翼の暴力、警察の家宅捜索、旅行先まで及ぶ尾行etc.）の報告である。70年（昭和45）に出た彼の著書「現代暴力論ノート—非暴力直接行動とはなしに」も、むろんそれらに直接かかわるものである。

数多い文章のなかには、そういうアクチュアルな運動と必ずしも直接にかかわらないものもある。たとえば、70年12月に78歳で物故したアナキスト、エスペランチストの大先輩山鹿泰治に関する文章（のちに「山鹿泰治・人の生涯」として本になった）。71年3月の106号から断続的に連載された、男女関係論、セックス論ともいってべき「家について」などである。しかし、これら（こまかく眼を通せばほかにもこの種の文章がたくさんあるだろうが）も、むろんただの天下泰平な隨筆隨想のたぐいではない。レッテル貼りの、少なくとも補助資料としては役に立つ文章である。

しかし、にもかかわらず、「イオム通信」通巻201号は、單に肩肘はつたプロバガンド用の運動誌、機関誌ではない。そこには、向井孝という一人の人間の血が通っている。それは、彼が詩誌「IOM」以来の詩人で、その後も秋山清の「コスマス」に属して詩を書き、それを「通信」にも再録し、それらをまとめて詩集「ピラについて」を昨年出したという理由からだけではない。また、私と同年にしては若く見え、日頃筒袖の和服を軽に着こなす温厚な紳士だということからだけでもない。

創刊直後の夫人のガン発病、入院手術、そして約一年後の死。その後の一男二女の生活。自らの视力、体力の衰え。酒。81年（昭56）1月の母の死。くりかえした転職。アジトや仕事場の移動。そして、運動にまつわるさまざまなオブスタークル。断念。それは、ヴァエヌ反戦運動以来の向井孝の斗いの記録であると同時に、一人の人間の人生の貴重な記録でもある。

先日会って聞いたところでは、創刊以来の固定読者が全国に50人ほど、あとは放つておこうとするので常時300人程度におさえている。そこで、ファックスとはいえ手書きの手づくり、送料だけの誌代無料、発送の事務だけでも大変な手間である。執念などという言葉は使いたくない。その頑強な自由意志の持久に敬意を表する。

▼ 一月をつくった中、20分ちかくすぎてしまふ。

モニのヒロサンが来てくれる。10月ひるごろ、送りやして、ときどきユカ内ぶりに山へ。

というよりは、引退して大いに遊ぶところでもつくづく、そり玉の入れのゆき

の荷物類へうるさいあまり大セイりしなんご）かかふドーンで60コ

ばかし、つまりする荷物類も金く手がつかない。もうナシとばかりして、そり玉の入れのゆき

をすどつくる、そり玉の入れのゆきをすどつくるから。印刷、書類も大へんやけど

金く手がつかない。もうナシとばかりして、そり玉の入れのゆきをすどつくるから。印刷、書類も大へんやけど

金く手がつかない。もうナシとばかりして、そり玉の入れのゆきをすどつくるから。印刷、書類も大へんやけど